



浜中の事情

釧路市医師会
浜中町立浜中診療所 所長
小川 克也

こと医療に関して、この町は特殊だと思っている。人口七千人に計2名と人数こそ少ないが、医者が長く居つく町なのである。私はこの町に来て13年目であるし、もう一人の医者は30年、私の前任者は50年である。その理由は、医者それぞれにあるのであろうが、共通しているのは、町立医療機関であるにもかかわらず、町の介入がほとんどないことである。経営だけを町にまかせている開業医のようなものなのかもしれない。

私がこの町に来た当初、実際に365日24時間診療を行い、身も心も滅茶苦茶になった。何度もこの町から出ようと思ったが、それを止めてくれたのは、この町を気に入った家内と、小学校や保育所に通う娘を通して仲良くなった町の方々であった。

2年目を過ぎ、少しずつ時間外診療に制限を加えていったが、一部の町民からの抗議はあったものの、それをもって直接私を非難する町議員はいなかった。むしろ、私がいなくなった場合、後任の医者を探し出す困難を町民に訴えてくれた。そんなころから、同じような地方で、医療機関が時間外診療を中止するということが報道されるようになった。ここより医師が多かったり、時間外受診者がずっと少なかったりしても、そのような事態になっていることを知り、また、実際に時間外診療で診た患者の状況から（軽症なら翌日の受診で十分、重症なら、そもそもここでは対処不可能）、最終的に時間外診療は心肺停止や検死が必要な場合に限ることとした。それ以降は、落ち着いて、この町で医療が続けられている。

最後に地方に医師が根付くための条件を、私の経験から挙げたい。医師が地元出身（私は浜中町出身である）、または似たような地方出身者であること。赴任前に近くの大病院に数年勤めて、同僚を作っておくこと。医師を励ます家族がいて、さらに医師としてではなく一町民として、地域社会とつながりを築いていけること。医師の家族が、地方でも充実した生活を送れるような、趣味、特技、順応性をもっていること。町の議員、および町民が自分の町のことを知っていて、医療を都会並みにしたいなどと高望みしないこと。以上である。

徒手空拳の医療

岩内古宇郡医師会
神恵内村立神恵内診療所 所長
三谷 深 泰

3月定年の目前、神恵内村立診療所への打診があった。村民約千人。午前の外来が中心。午後は月曜と金曜が休診。火曜3時まで外来。水曜は往診、木曜は移動診療、そして1年契約。精根尽きた思いだが、これならやってみるかと思った。先方の強い要望もあり、休みも取らず4月1日、おっとり刀でやって来てみて驚いた。患者が居ないのだ。1日の外来、3人以下にはならないが、決まって6人を超えない。こんな具合で、5月半ばまで連日続いた。また、診療所を示す看板もない。

大変な所へ来たという思いがする一方、「医者よ、まず汝自身を直せ」の箴言通り、しばらくは今ここで、勤続28年、いや40年の疲れを癒やせという、村民の温情ではないかと考えた。そして、いっぺんにこの村が気に入った。

半年過ぎた当地で、一番多かったのは蜂刺され。十数件あり、2度刺された患者もいた。

2年前、500万円で購入し、あまり使っていないエコー機器が故障。中枢部品の交換が必要という。御代は50万円。これは新手の詐欺である。単純X-Pもうまくとれない。X-P装置は正真正銘の旧式で、今度故障すると、交換すべき部品がないとのこと。次々に注射剤が期限切れを迎えた。ラシックス、ソセゴン等1Aも使用せず、梱包ごと破棄される。これらを1Aずつ小売りしないのだ。エリスロポエチン製剤は単品で競って販売するが、廉価な薬は梱包単位。病院中心の情け無用の資本主義が徹底している。

さて、藤本病で知られる甲状腺外科の藤本吉秀氏は「現行の出来高医療制度は、ヤブ程もうかる。私なら、甲状腺を触るだけで診断できるが、ヤブは判らないから色々検査する」と喝破した。色々検査もできないヤブはどうすべきか、わが地方医療の窮状である。

近々、外来は一ケタと寂しい日、30人超とヘルター・スケルターの時もあって、平均すると15人弱。待ち時間なしの5分診療のリズム、五感を頼りに直感（第六感）が主役。広くない待合室は、いつもがらだ。ただ、定期的に通院してくる患者さんの大半は、とても元気な後期高齢者だ。「どうですか」の問診に、「大丈夫、変わらない」が定番。真に少数精鋭の選りすぐりである。

「麦蒔きや 百まで生きる かおばかり」 蕪村